

# 現代的な苦悩と自由の問題

山竹 伸二

キーワード：本当の自分、近代批判、内的規範、第三者の視点、エディプス・コンプレクス、自由

## 近代社会と自由の意識

近代社会の到来によって、人間は自分がどのような存在であり、どうありたいのかを考えながら行動する可能性が広がった。しかし、実際には社会のルールや価値観と折り合いをつけながら行動する場面のほうが多く、自分の欲望を抑え込むことも少なくない。そして、社会の価値観に合わせたふるまいをしているうちに、自分の気持ちに分裂感が生まれてくる。自分が本当はどうしたいのか、なにをすべきなのか、よくわからなくなってしまうのだ。

こうして、自分の思いどおりにいかない憤り、不安全感は、本当の気持ちは社会のルールや価値観によって抑圧されている、そんな考えを生み出すことになる。いまでは「本当の自分」や「無意識の抑圧」が重視され、近代社会は本当の自分、本当の感情を無意識に抑圧してしまった、現代的な心の病や苦悩はそこに原因があるのだと、多くの人が信じている。

フロイトは「文化への不満」という論文において、神経症の原因が文化による欲望の抑圧だと考え、社会からの要求が個人の欲望を抑圧し、神経症をもたらしたのだと述べている。<sup>(1)</sup>そのため、多くの人々は文化に対して不満を抱くようになったというのだが、この考え方は「社会が個人を抑圧する」という抑圧論的な社会観の原型となっている。

実際、個人の欲望を抑圧した社会規範を憎み、意識より無意識が、理性より感情や身体が大事だと考え、理性的な思考は感情を抑圧し、自由を奪うものだと考える人は少なくない。現代社会のなかで「自分探し」が流行ったり、「本当の

自分」が求められるのも、こうした実感が背景にある。要するに、近代社会のもたらした理性を重視する考え方は、人間の自然な感情や自由を抑圧するような合理主義的社会をもたらした、そう考えられているのである。

だが、こうした考え方は必ずしも正当なものとはいえない。近代社会は自分の判断によって行動すること、自由に人生を選択する可能性が広がってきた時代であり、相互の自由が尊重され、お互いの自由を守るために、合意に基づいたルールが尊重されはじめた時代だ。つまり、自由を実現するためにこそ、理性を重視する考え方が必要になったのだ。

近代以前のヨーロッパでは、宗教的な価値観や社会のルール、役割に従うことは絶対的で変更不可能であったし、職業も生まれながらに決められ、自分の自由な意志で生き方を選択することはできなかった。しかし、近代になり、自分の意志で行為を選択できる条件が整ってきたことで、事情は大きく変わった。人々は自分の行為を内省し、自分がどうしたいのか、どうすべきなのかを深く考えるようになり、自己の内面を見据える視点が形成されたからだ。

自分の行動を内省することは、自分を第三者の視点から客観的に見つめるようになる、ということでもある。第三者の視点とは、具体的な他者の視点ではなく、「みんな」の視点ともいうべき、一般化された他者の視点である。したがって、近代社会は第三者の視点が強くなり、自己意識が強くなった時代だと、さしあたって考えることができる。

この内面を見据える第三者の視点が強くなったことを端的に示しているのは、宗教改革によるプロテスタントの登場である。ルターは心の外側に存在する神ではなく、人間の心という内面性を重視し、信仰は神が内面に宿ることで真

理や善を確信することだと主張している。その考え方は、プロテスタントたちに自由を意識させることになったが、それは同時に内的な善悪の葛藤に悩まされることにもなった。

ヘーゲルは『歴史哲学講義』のなかで次のように述べている。

「宗教改革にはじまる精神の発展と進歩は、人間と神との交流のなかで、客観的な世上の動きにも神のやどることを確信した精神が、おのれの自由を意識し、世のなかの動きに身を投じ、世俗の仕事に邁進する、という点にあります」<sup>(2)</sup>

ヘーゲルによれば、近代になってプロテスタントが内面性を重視したことは、人間が自由を実現していく上で必要な過程であった。自由を手にすることは、自分で決められるということであり、それは自分がどうしたいのか、自分で考えることで可能になる。感情や衝動は一過性のものであり、真の正義を知るためには、衝動にとらわれない思考こそが必要になる。自分の内面を意識し、自分を客観的な視点で考え直すこと、それは人間が自由を実感するための基本的な条件だといえるだろう。

また、マックス・ウェーバーは、資本主義的な価値観はプロテスタンティズムの倫理を中心に広まったと主張している。<sup>(3)</sup> なぜなら、死後に救済されるためには神の意に適わねばならないし、神の意に適うためには一生懸命働かねばならないからだ。といっても、予定説では誰が救済されるのか神によって予め決められているので、一生懸命働いた恩恵として救済されるのではなく、自分が救済される予定になっているはずだ、という確信に基づいて一生懸命に働くことになる。

こうして絶えず自らを内省し、監視し、誰も見ていなくても一生懸命働く禁欲的な倫理観ができあがり、それが資本主義経済の活性化につながったというのが、ウェーバーの主張である。実際には、こうした倫理観で資本主義の発展を説明することにはかなり無理がある。しかし、プロテスタントが自己を神の視点から見つめ直すようになったとすれば、それは第三者の視点から自己を見つめ直すようになること、そうした意識の変化に深く関わっている。

第三者の視点から自己を見つめ直すのは、たんに自己意識が強くなったことを意味するので

はない。そもそも自己意識とは、対象へ没入している意識から、その対象へ向かっている自分、行為している自分自身へと視線が向け直され、自分が何であるのか、他者からどのように見られているのかを内省する意識である。自己意識が強ければ強いほど、必然的に他者からの視線を気にし、他者からの承認を強く求めることになるため、自己中心的な争いが生じやすくなる。

ヘーゲルによれば、この自分だけが認められようとする未熟な意識は、近代に至って大きな変化を遂げるという。自分への承認だけを要求するのではなく、他者を承認する意識、自分も他者も共に承認できるような普遍性を求める意識となるからだ。近代において成熟してきた自己意識（理性）は、私的な欲望と社会制度を結びつける考え方を求めるようになり、自分だけの納得ではなく、万人の納得を求めるようになった。そこに万人に共通する視点として、一般的な他者の視点、第三者の視点が生まれてくるのである。

## 現代思想の近代批判

第三者の視点から自己を見つめ直すことは、自由を実感するためには不可欠な意識の変化である。したがって、近代社会がこうした意識を生みだし、より自由の条件を深く考えるようになったことは望ましいことだ。ところが、現代社会では総じて近代的な考え方に批判的であり、それはむしろ自由を損なう考え方として捉えられている。その典型的な近代批判はポストモダン思想などに見ることができるが、なかでもフーコーの考え方は、私が第三者の視点と呼ぶ問題を批判的に捉えている点で興味深い。

フーコーは『監獄の誕生』の中で、パノプティコンという監獄を例に挙げて、近代社会が自己監視を強化する社会であったと指摘している。パノプティコンとは、囚人からは監視者が見えないため、逆に「どこかで監視されている」ような気にさせる監獄であった。実際には監視者・支配者がいないかもしれないのに、絶えず何かに怯え、不安を抱き続けることになり、結果的には見られていなくても、いつも規律正しい行動を取りはじめる。自己の内面に宿した監視者（第三者）の視点、それが絶えず目を光ら

せることになるからだ。そして、このようなパノプティコン的な仕組みは監獄だけでなく、学校や兵営など、近代社会の随所に浸透していたとフーコーはいう。

内面化された規範は絶えず意識され、理性的判断によって行為が選ばれるわけではなく、むしろその多くは身体化され、無意識のうちに習慣化した行為やふるまいとなって現れる。フーコーによれば、規律・訓練による規範の身体化はすでに近代以前にあったが、近代においては、自分自身を監視する視線を意識することで、誰も見ていなくてもルールを守り、自己管理が強化される時代となった。そしてそのルールや価値観がすっかり身についた時、それは無自覚なものになる。

「これまでは規律・訓練といえば、明確でどちらかというと閉鎖的な場所——兵営、学校、大きい仕事場——で古典主義時代に完成されてきた制度であって、その全面的な適用が想定されても、もっぱら、ペスト状態の或る都市という限定された一時的な規模にとどまっていたが、ベンサムはこうした規律・訓練を、いたるところに常時目を光らせ社会全体に隙間も中断もなく及ぶ網目状の仕掛けにしようと夢想するのである」<sup>(4)</sup>

監視という装置の偏在によって、規律・訓練は社会のすみずみまで浸透する時代になったというのが、フーコーの主張である。こうして、「働かなくてもいいぞ」と言われても、無意識化された内的規範は「一生懸命働くべきだ」という価値観・命令を身体に刷り込んでいるため、「やはり働かなくてはだめかな……」という気にさせられる。

フーコーの主張の要点は、権力が見えない形で私たちの内面まで浸透しているということにある。といっても、フーコーは規律・訓練を意図的に行っている特定の権力者を想定しているわけではない。重要なのは、見えない監視する他者を想像上で抽象化し、自己の内面に自己を監視する他者の視線を作り出したという考え方だ。

これは、プロテスタントが神の視線を気にして内省を深めるという、ウェーバーの主張に重なっている。神という第三者の監視する視線を勝手に想定し、絶えず自分自身が神の意に適っているのかどうか、自分自身でチェックするこ

とになるからだ。また、これは父の命令を内面化して超自我を形成するというフロイトの理論にも重なっている。

神＝父＝監視者が抽象化され、そうした他者の視点が無自覚となることによって、それを自らの意志だと思ふようになり、やがて個人の内面に主体性の基準となる自己ルールが形成される。こうして近代社会では、自分自身を監視する視線を意識することで、誰も見ていなくてもルールを守り、自己管理が強化される時代になったというわけだ。

以上のことからわかるように、自分を第三者の視点から見据え、内省するという近代的な意識、主体性が、フーコーの理論ではネガティブに捉えられている。ヘーゲルは自己を内省する意識を自由の条件として考えたが、フーコーではそこにも権力が入り込んでいることになり、近代的な内省の意識に対する評価がまったく逆になっているのだ。

現代思想は総じてフーコー的な見解に同意し、近代思想の掲げた自由を、理性の欺瞞だとして批判している。むしろ近代的な理性中心主義は、様々な社会的ルールの下に人間の感情を抑圧し、不自由な状態をもたらしたのであり、本当の自由を実現するためには、近代的思考から脱却しなければならないと主張しているのだ。

近代において、自分がどうあるべきか、どのように行為すればよいのかを、自己の内面に深く問いかけるようになったことは、私の考えでは個人の自由が実現されつつある証である。しかし、現代思想の多くは、理性的に自己を捉えることには限界があるのだと、この問題を否定的に考えている。私たちには意識的に捉えきれない部分（無意識）があり、意識や理性を過信すれば、自己中心的な判断に陥って過ちを犯すというのである。

要するに、近代において自己を内省する第三者の視点が強くなったことを、私は自由を得るための条件だと考えているが、現代思想ではこれを権力の内在化と考えている。そこで、近代が重視した理性と主体性の限界を示すために、無意識や身体性を強調し、意識や理性的な思考は無意識の構造によって規定されているという主張が、現代思想の主流を占めるようになったのだ。



## 内的規範と第三者の視点

ところで、第三者の視点から自己を見据えること、自己を内省する意識は、個人の成長においてはどのように獲得されるのであろうか？

フロイトのエディプス・コンプレックス理論では、父親の存在が重視されているが、これを家族における父性の重視という意味で受け取っている人は多い。だが私の考えでは、これは社会性の重視という意味で捉える必要がある。もっといえば、これは第三者の視点を獲得する上で、何が必要なのかを物語っている理論だと解釈すべきである。

つまりこういうことだ。幼児にとって絶対的な母親との関係は、父親の介入によって揺るがされる。それまでは、ただ母親に怒られたり、ほめられたりすることへの不安と欲望から、反応的に悪い行動を抑制しているだけだ。しかし、父親の存在が母子関係に介入してくることで、父親はあらゆる他者の代表として第三者の視点を意識させる位置に立つ。母親の視点だけではなく、他の人々はどのように見ているのか、それが父親をとおして意識されてくるのである。

私たちの日常を考えてみても、あるルールが強く働くのは必ず三者以上の関係である。二人だけの関係においては、ルールは絶対的な意味を感じられない。二者関係のルールを客観的に見据える第三者は、そこには存在しないのである。もし二者関係のゲームに第三者が介入してくれば、誰もが納得するようなゲームへと、自らのふるまいを転じることになる。三者関係は関係そのものへの客観的な視点を可能にし、効力あるルールを成立させているのだ。

社会につながるような内的規範（内面における自己のルール、価値観）を形成するためには、母親の言動が第三者に準じたものであるかどうか、そのことが子どもに確認できるかどうかが重要である。第三者とは必ずしも実在の父親だけを指すのではなく、他の影響力のある人物でもいいし、もっと漠然とした世間や社会全体をも意味している。そもそも父親が重視されているのは、彼が世間や社会秩序の代表と見なされるからに他ならないし、母子家庭であっても、近所の人や学校の先生などが母子関係におけるルールに介入できれば、その子の内的規範は一

般性を得ることができる。

必要なのは、父親がいない家庭でも、あるいは母親がいない家庭でもそうだが、子どもに直接接する大人は、子どもを叱ったり褒めたりする場合のルールが勝手な思いつきではなく、社会規範に準じた言動であることを、できるだけ子どもに気づかせるようにすることだ。

父親が厳しくルールを教えても、それが社会規範や世間の価値観と大きくズレたものであり、しかもそのことに母親が口を挟まなければ、その子の内的規範は一般性のない、社会の規範と齟齬を生じるような内的規範になるかもしれない。この場合、その子は大人になっても父親のルールに強迫的に従ってしまうかもしれない。

母親だけがルールを教え、しかもそのルールには一貫性がなく、感情的で矛盾に満ちたコミュニケーションになっている場合はさらに問題である。ニコニコしていたかと思えば、急に不機嫌になり、悪いこともしてないのに怒られるなら、子どもはどうしていいのかわからなくなるだろう。このように矛盾したコミュニケーションが繰り返されれば、その子は他人の意図を推し量ることができなくなる。そして他人のちょっとした身振りや行為に対し、それが一体何を意味しているのかを理解できず、安心感が得られなくなるかもしれない。

といっても、母親の言動が常に社会規範に準じたもので、普遍性、正当性のあるものでなければならない、というわけではない。実際には、母親の押しつけるルールは社会規範と多少はズレがあるはずだし、時には気まぐれに怒ってしまうこともある。だが、子どもは母親の言動がいつでも正しいわけではない、ということに気づく必要がある。それは一般性のある内的規範を形成するためにはむしろ自然な過程なのである。

精神分析医のウィニコットは、幼児に必要なのは完全な母親というより、むしろ「ほどよい母親」だと主張しているが、これは理に適った考え方だ。<sup>(5)</sup>なぜ「ほどよい母親」のほうが子どもの内的規範の形成によい影響を与えるかといえば、それは母親の判断が絶対だと思われれば、その子どもの善悪の判断は、社会に開かれたものではなくなるからだ。母親は社会規範や第三者の意向を重視してはいるが、完全にそれを遂

行しているわけではない。子どもはそのことを知る必要があるし、少しずつ第三者の視点から善悪の判断ができるようになる必要がある。

最初は母親に愛されるために、嫌われないために、母親の命令するルール of 正しさなど考えず、ただ反動的に従っているだけだろう。しかし、母親のルールが絶対的なのではなく、母親も他のルールに従っている、より普遍的で誰もが従っている大きなルールがある。このことが、父親や他の人々をとおして意識され、第三者の視点が、一般性のある内的規範が形成されることになるのである。

## 内的規範のゆらぐ時代

以上のように、最初は家族のルールや価値観を内面化することが必要だとしても、その内的規範は家族以外の人たちとの関係によって、より一般的な規範へと練り直されねばならない。内的規範が一般性を有するということは、それが単に自分なりのルール、価値観ということではなく、その社会の大多数の人が共通に理解できるようなルール、他人と承認し合えるような価値観になるということだ。

社会規範の影響力が強い社会においては、この共通に理解されている規範は普遍性を帯び、それに背けば強い罪悪感が生じることになるだろう。なぜなら、他者が見ていようと見てまいと、あるいは他者がどう思おうと、善は善であり、悪は悪だという規準がはっきりしているからだ。しかし、現在の日本のように相対的な価値観が乱立した社会では、その社会のルールに普遍性を感じることは難しい。しかも、核家族化に加え、家族同士の交流は激減しているため、家族内でのルールや価値観が絶対化しやすい状況にある。

たとえば、父親が仕事人間でまったく母子関係を介入しないなら、厳密な意味では第三者が不在なのであり、子どもの内的規範は一般性を持つことが難しくなるかもしれない。また、子どもを完全に自分だけのルールに従わせようとする母親の場合も、子どもは一般性のある内的規範を形成することが難しくなるだろう。父親が一般性のないルールや価値観を押しつけ、しかも母親がそれを黙認しているという状況もまた、

当然、内的規範は一般性を有することができなくなる。こうした家族問題の背景には、一般性のある社会規範そのものが弱くなっているという現代的な事情があるのだ。

近代社会における理性への信頼は、今世紀前半に起きた数々の戦争によって挫折することになった。理性への信頼は失墜し、主体性を中心とした近代思想は自己中心性へつながらず退けられた。そして社会は相対主義と懷疑主義に陥り、人々は生の意味や目標を見失いがちになってしまった。現在の日本においても、社会規範の絶対性が弱まり、学校や家族における秩序への求心力も急速に衰えている。社会規範が弱まれば、それをモデルとする個人の内的規範も他者との共通性を失い、脆弱な規範とならざるを得ない。そのため、「どうしていいのかわからない」若者が増えているのである。

絶対的な価値観や行動規範を持たないからこそ、誰もがメディアの発信する流行、他者の行動様式に敏感になり、「どうしていいのかわからない」という不安を、他者に遅れを取らないこと、模倣することで解消しようとする。それはさらにエスカレートし、自分が他者よりも優位であることを競い合うゲームとなる。

こうしたゲームにおいては、その場ではそれなりに楽しみを見出すことができるのだが、価値観がめまぐるしく変化するため、まわりに振り回されることになりやすい。普遍的な規範や価値観がなければ、まわりの人たちに同調することでしか、他者に認められる術はないように思われ、他人の反応ばかりが気になり、恥をかくこと、仲間はずれになることを怖れるようになる。

こうして、仲間内のルールや価値観ばかりを重視し、そこに同調し、そこから取り残されないために必死になり、強いストレスと不安を抱え込むようになる。そして、周囲に同調し続けることに疲れたとき、家に引きこもり、学校へ行くこと、外部の仲間と接触することをあきらめるかもしれない。あるいは、不安障害やうつ病を発症することにもなりかねない。

現在の社会では、社会規範の絶対性が崩れているために、親は子どもにはっきりした規範を与えることができず、むしろ自由に育てようとして甘やかしがちになっている。核家族化と少

子化の影響もあって、子どもは親から「～ねばならない」という教えを受けることが少なくなり、万能感を持った自己像（理想自己）を修正できなくなるのである。そのため、強い内的規範は形成されず、衝動的な欲望を抑えることが難しい子どもが多くなる。

それでも学校にいけば、家族のルールや価値観は揺るがされ、より普遍的な社会規範や価値観を身につける機会が与えられる。そうなれば、内的規範もより一般性のあるもの、社会性のある規範や価値観に修正されるはずなのだが、かんじんの学校がこの機能を果たしていない。だからこそ、より大きな社会の規範や価値観ではなく、仲間内のルールや価値観にふりまわされやすくなるのだ。それは社会規範そのものが弱くなっていることの証でもあるのだ。

## 現代的な苦悩と自由

すでに述べたように、第三者の視点から自己を見つめ直すことは、自由を実感するためにはどうしても必要である。近代社会において、人間が自由に生きるための現実的な条件が整いはじめると同時に、人間の自己意識が成熟し、第三者の視点から物事が考えられるようになった。それは自由な社会が実現されるための大きな前進だったといえる。

しかし、現在、社会規範における普遍性が弱まり、第三者の視点から自己を捉え直すという意識も弱くなっている。現代思想においても近代批判が強くなっており、第三者の視点による普遍性を求める視座を真理主義と混同し、相対主義の蔓延を助長しているのが現状である。

人間の欲望が現在の快感を超えて未来の可能性を求めるのは、幼少時、その場その場の欲望を抑制することで親に愛され、まわりの人たちに認められるという見返りがあったからだ。このことが、人に認められるための行為の基準を内面化し、内的規範を形成する大きな要因となっている。この欲望は身近な人たちを超えた抽象的な人々、つまり社会からの承認を求めることにつながっており、この他者は抽象的な存在であるため、欲望の対象は他者の承認ではなく、「普遍的なもの」そのものと重なっていくことになる。

現在のように「普遍的なもの」が否定され、社会規範の弱くなった状況では、ある意味で拘束の少ない、より自由な社会が実現されているようにも見える。しかし、現代人がそれほどいまの状況を喜んでいるかといえば、とてもそうは思えない。それは、私たちが他者に拘束されない自由を求める反面、他者から認められたい、愛されたいという欲望をもっているからだ。

だが、他者に認められ、愛されるためには、他者の拘束を逃れて自由に生きているだけではできない。そこに必要なのは、第三者の視点で自己を見据え直し、多くの人が認めるようなルールや価値を重視することだ。第三者の視点で自己を意識し、自己を了解しつつ可能性を思い描くこと、それができなければ最初から自由の意識などありえない。近代のもたらした理性的な思考がなければ、そもそも自由の意識は成り立たないのである。

確かに社会規範は、私たちの自由な行動や欲望を制限する面がある。しかし、それは私たちの安全を保障し、また社会の役割の中で認められる喜びをも提供している。自由に自らの生き方を選び、その可能性のなかに生の意味を見出すことも、人々の合意によって成り立った社会規範があるから可能なのだ。それは近代以前の社会では考えられないことだった。

私たちがときに不遇感を抱き、些細な制約でも過大視して不満を感じてしまうのは、むしろ自由を求める意識があるからだ。それに、自由とは自分の頭で考え、自らの意志で判断し、選び取ることであり、そこには様々な葛藤や苦しみ、不安もつきまといっている。自分で選び取ったことが失敗であったとしても、最早それは誰の責任でもなく、自分自身の責任である。こうした自由の重責に耐えられない人間は、すぐに自分の外側に強い人間、権威のある人間を求め、その人間にすべての責任を委ねつつ、従ってしまうだろう。

フロムは『自由からの逃走』の中で、自由が孤独や不安をもたらすこと、そのために自由の重責を外側の権威に委ねやすいのだと述べている。<sup>⑥</sup>人間は自由であるがゆえの不安から、自ら考えて行動する自由を手放すというのだ。人間は自由の重荷を逃れて他人任せになりがちだが、一方ではそこに不自由を感じてしまう。本当は

自分の意志で判断できる場面でも、人に嫌われないために、認められるために、他人の指示どおりに行動してしまう。だが、それでは自由を感じられないため、そのいらだちは社会への不満や神経症という形で現れる。

人は誰でも自分が満足のできる状態を、つまり幸福を求めているのだが、それは衝動的な欲望の満足だけで得られるものではなく、他の人から愛され、認められることを欠いてはありえ

ない。そのため、私たちは衝動的な欲望を我慢して、他者に認められるような行動、愛されるような行動を選び取る。自分の行動に対する判断を他者の手に委ね、他者に同調することがあるのも、そうした欲望の現れなのだ。

したがって、近代社会のもたらした第三者の視点は、誰もが認めるような行為や価値を考え直すために、そして自由の意識を取り戻すために、どうしても必要なものなのである。

- 
- (1) フロイト「文化への不満」『フロイト著作集3』（高橋義孝他訳）、人文書院、1969年、450ページ
  - (2) ヘーゲル『歴史哲学講義（下）』（長谷川宏訳）岩波書店、1994年、323ページ
  - (3) ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳）、岩波書店、1989年、310～311ページ
  - (4) フーコー『監獄の誕生』（田村淑訳）新潮社、1977年、210ページ
  - (5) ウィニコット『遊ぶことと現実』（橋本雅雄訳）岩崎学術出版、1979年、14ページ
  - (6) フロム『自由からの逃走』（日高六郎訳）東京創元社、1951年、159～160ページ